

温容慈眼の政治家

前田敬二

私が大平先生に最初にお目にかかったのは、先生が経済安定本部の公共事業課長をしていた昭和二十三年の夏であった。香川の県会議員として、地元の用水の災害復旧工事について実情を陳情しに上京したときだが、そのとき受けた率直な第一印象というのは、「なんと朴訥な人やなあ」ということであった。

それから昭和二十七年十月に、先生が初めて衆議院の選挙に出馬されたとき、私は救国青年連盟で加藤さんを担いだ関係で、加藤陣営におったわけだが、ライバルから見ると、これで選挙になるのかと思うほど、大平陣営の選挙はプロが少なく、きびしかったような気がする。先生の選挙演説も、数字をあげての高邁な経済理論といった趣が強くて、同じ選挙区の福田さん、佐野さんなどの、立て板に水を流すような雄弁調の演説をききなれた選挙民にとっては、勝手がちがってよく理解されたとは思えなかった。しかし、堂々第二位で当選されたのは、エリート官僚らしくらぬ先生の庶民性に選挙民が好感を寄せたからであったと思う。

ところで私は、昭和三十年の第三回目の選挙のときから大平陣営に加わることになったが、以来二十五年間、先生から数え切れないほどのご指導ご教示を頂戴している。そのなかでも特に忘れられない思い出を、次にいくつかあげて先生を偲ぶことにしたい。

私がいちばん恐れ入って、いまでも見習っていることだが、私が議員会館内の大平事務所に電話したときに、先生が直接、電話をとられて返事をされたことであった。秘書全員がたまたま出払っていたせいかもしれないが、

陳情をした地元の人間として、代議士の先生が自分で電話をとられたことに、私は非常に強い感銘を受けたのである。それで私も、以後は事務所にいるかぎり、自分で電話をとるように心掛けている。

それから瀬戸大橋の問題で、先生にご相談申し上げたとき、「他の県みたいにそんなに大挙して陳情する必要はない。そんなことは君らが暇と金を使つてすることではない。それはわれわれ国会議員の仕事なんだ」といつて叱られたことがある。これも、先生の仕事に対する厳しい姿勢を示すものとして、忘れられない思い出である。また、あるとき先生と最後のツメを相談しなければならなくなつて、宏池会の部屋だつたかに電話したことがあつたが、「前田君、君が心配していることは問題なんだよ。問題といふことは話題とちがつんだから、必ず解決される」といふような表現で、神経質な私に、何もくよくよと心配する必要がないのではないかと、自ずと落ち着くさ、といつて諭してくれたこともあつた。

さらにもう一つは、県議会のある役員人事で相談したときのことで、前田君、それはえらいこつちやな。しかし一旦決心したら変えるなよ。変えたらこちやつくよ」と、政治家にとつて大切なことは「熟慮断行」であることを教えてくれたことであつた。

まだまだ思い出しはつきないが、先生は大臣となり総理という地位につかれても、郷土政界にあるかなきかの存在でしかない私を、どんな場合にも温かく迎えて下さつたのである。例えばいろいろきめかねている問題に対して、公私にかかわらず解決策を示して下さいと、前田君、どんなことにも結末がある。あまり気にしないで悠々としていたまえ」と、いつも慰めて下さつた。

この大平先生の「温容慈眼」に、もはや私どもは親しく接することはできなくなつた。「人生朝露」の感に堪えず、私は先生のみ豊のご平安をお祈りするばかりである。合掌。

(香川県議会議員)